
すれ違い（馨夢？

峰春秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すれ違い（馨夢？）

【Zコード】

N4103M

【作者名】

峰春秋人

【あらすじ】

馨の恋愛です。

せつなくはない気がする

(前書き)

だあー光がでてない

「ひ・・・光君。私・・・。」

「僕は馨だよ。」

「え？」

「光と僕の机間違えたでしょ？」

「あ・・・。」

「でもさー僕は君が好きなんだ。」

「え！」

「だから僕と付き合ってくれない？」

「・・・ひ・・・光君がいって言つなひ。」

「・・・だつてよ、光。」

「え？」

「どっちでもいいんだあー君。」

「何様のつもり？」

「ひどい！」

そんなことが昔あったと常陸院ブランザーズは音楽室のソファーに座りながら考えていた。

「光！馨！」

「ん？」

環の声と一緒にチョップが一人の頭に落ちてくる。

「なに！」

「お客様がお待ちだぞ。」

そういうつて環の視線の先には何人のお客様さんがいた。

一人はにっこりと笑つてそのお客さんに笑顔を振りまく。

「でも、馨。あの手紙いいのか？」

「あ……。殿。ちょっと用事を済ませてから行くよ。」

「用事？」

「ラブレター。」

「ふーん……。また中学のように遊ぶなよー。」

「わかつてゐよ。」

そういうて二人は中等部の時のことを思い出してホスト部の門を後にした。

桜蘭高校の裏庭には薔薇が咲き乱れてとつてもきれいなところだ。そこに立つのは光か馨を待つ一人の中等部の服を着た少女。茶色い髪の毛が背中の真ん中あたりまで伸びていて前髪は少し長めといった感じだ。

少女を見つけた瞬間光が薔薇の中に潜る。
馨が少女のところにツカツカと歩いて行つた。

「僕に手紙をくれたのって君？」

優しい口調で声をかける馨は手に持つた薄ピンクの封筒をヒラヒラとして見せる。

光の声にこちらを向いた少女。髪の毛が風に乗つて一気に右へと流れる。

それを手で押さえながら目の前にいる光に目を向ける。

その目は大きくて淡い黒色をしていた。

（ルックスとか顔は悪くないね。）

そう思つて口を開く。

「君さー僕と馨の机間違えたでしょ？」

「え？」

「馨が好きなの？」

「好きです。」

「でもさー馨は好きな人いるみたいなんだ。」

「そうなんですか。」

「でさー僕と付き合つてくれない？」

「？」

「僕さ君に興味があるし好きなんだ。」

「・・・お断りします。」

初めての返答。

薔薇の中に隠れていた光も、答えをもらつた馨もどちらも驚きの色を見せた。

少女は悲しそうな顔も嬉しそうな顔もしないで淡々と言葉を紡いだ。

「私が好きなのは馨先輩だけです。光先輩とそりゃ・・・顔とかすごい似てると思います。けど、一人とも性格は全く違います。だから、いくら光先輩が私を好きでも私は馨先輩が好きなのでお断りします。」

光と馨はいまだに驚きの色を隠せないでいた。

そして少女の再び開かれた口から出た言葉に一人はもっと驚きの色を濃くさせた。

「ところで・・・なんで馨先輩が光先輩つて偽つたんですか？」

その言葉の意味は一瞬では理解できないだろうがよく考えてみるわかつてくる。

光と馨は最初は頭にクエスチョンを浮かべていたが時間がたつにつ

れて理解した。

【この子・・・。田の前にいるのが馨だつてわかつてゐる】
光の脳内で電気が走つて思わず薔薇から身を出してしまつ。

「ほら。私の前にいるのが馨先輩です。」

「・・・なんで?」

「・・・霧囲氣です。」

「え?」

「馨先輩は落ち着いた感じの霧囲氣で光先輩は活発な感じです。」

「霧囲氣なんて初めて言われた。ねえー光。」

「ああ。」

「やつぱり・・・誰かいると思つたら光先輩だつたんですね。」「誰かいるつて・・・さつきから立つてたよ。」

「え? そんなんですか? すいません。私・・・田が見えないので。」

思はず一人は田を見開いて少女をまじまじと見つめる。
白い棒は一切握られておらず手は前で組まれている。

「あのや・・・白い棒は?」

「えーとその・・・さつき落としてしまつて。拾おうとしたら先輩
が来て。・・・スマセンが馨先輩。近くに落ちてると思ったんです。
取ってくれませんか?」

悲しそうな田をする少女に馨はうなずいて棒を探そうとしゃがみこ
んだ。

光は少女のそばによつて肩を軽く抱きしめた。

「光先輩。有難うござります。」

「えーと名前は?」

「妃鶴飛鳥です。」

「飛鳥ちやん、ついで僕の瞳をしつかり見れるの？」

唐突に光が飛鳥に聞く。

飛鳥の大きくて丸い瞳が光の瞳を見つめている。
それは田の見えない人とは思えない。

「私が視力を失ったのが一年前なんです。だから感覚的にわかるんです。」

「へえー。」

「ちょっとじつとしてトわい。」

「ん？」

そういうと飛鳥は細くて白い腕をゆっくりと伸ばして光の顔を触つた。
冷たくてしつとした指が光の輪郭などをなぞる。

「……すくきれいな顔立ちなんですね。」

「そう？」

「はい。すごくきれいです。」

「顔に触つただけでわかるの？」

「うん。わかるよ。」

「あつた！」

馨の声が薔薇園に響く。

そしてその手に握られた白い棒を持つてゆっくりと飛鳥に近づく。

「はい。」

「有難うございます。馨先輩。」

「えーと……名前は？」

「ですから、妃鶴飛鳥です。」

「妃鶴つてあの・・・大手花メーカーの？」

「そうです。」

そういうつて飛鳥はにっこりと笑う。

真つ黒な飛鳥の瞳がまたまつすぐしに馨のことを見つめていた。

「すごい綺麗な目だね。」

「ありがとうございます。で・・・馨先輩。」

「ん?」

「付き合ってくれますか?」

すっかり忘れていたその言葉に思わず押し黙る馨。
光は心配そうに後ろから見つめていた。

「えーと・・・一週間のお試し期間にしない?」

「お試し期間?」

「うん。僕も君もまだお互いよく知らないから一週間だけ付き合つ
の。」

「んー。馨先輩はいいんですか?」

「うん。」

「なら・・・いいですよ。」

この手は何度か使つたことがあつた。
めんどくさいことかに・・・。

でも、飛鳥は違つた。本当に知らないから。
光と馨はすぐに部室へと戻つて行つた。

「あれ?光に馨。今日は休みなんじゃないの?」
「ハルヒ。いや・・・ちょっと出かけてただけ。」

「ふーん。環先輩が探してましたよ。」

「ああ。」

そういうつて光と馨はハルヒの話を聞いていたのかいなかドカツとソファーに腰を置いた。

馨は飛鳥のことを思い出して「テートのプランを話し始めた。

「光。あのセーデンナ『テートがいいと思ひ?』

「・・・目が見えないから音楽系とか?」

「でも、花が好きだから花園とか?」

「うーん・・・なんか初めての所に行かせたらいいんじゃないの?」

「モールとか?」

「買い物でも行こうかな。」

「そうすれば?」

「光。」

「ん?」

「近くで見ててよ。僕自身ないから・・・。」

「・・・いいよ。」

優しく微笑んだ光の顔を見て馨も自然にほほ笑んだ。
そこへ現れた影は一人の頭をぽかりと叩いた。

「こら! 部活動をさぼるとはい一度胸だな!」

「だーかーら。」

「休むつて言つたじやん。」

「用事! つて言つていたぞ。つたく。で、丁重に断つたのか?」

「・・・いいや。」

「ん! またいじめたのか!」

「違うよ。」

光がいつももなく冷静な声で環の顔を見上げた。

環がしばらく黙つたままでいたがすぐに理解したのか表情がどんどん変わつていった。

「ま・・・まさか。」

「そ、う。」

「付き合ひの、か！」

大声で言つたため音楽室にいた部員には聞こえてしまつただやう。環の大声を聞いて一人は耳をふさいだ。

「えー、ひかちやんとかおちやん付き合ひの、？」

「へー。おめでとう。」

「おめでとう。」

「支持率が下がらないといいが・・・。」

四人の部員から思い思いの言葉がかけられる。光と馨はほほを膨らせて部員に告げる。

『お試し期間中なー。』

「お試し期間だと？」

環が一人の顔をまじまじと見つめて尋ねた。ほかの部員も事情を知りたそうだった。

「だーから、中等部の子が馨を好きなんだけどお互によくわからな
いからお試し期間中なの。」

光が淡々と説明して馨に同意を求めるように視線を移す。
馨もうなずいてみんなを見渡す。

「へえー。馨のことが好きな中等部の子かー。」「

「どこの子なんだ?」

「大手花メーカーの娘さん。」

「妃鶴飛鳥嬢か?」

「そう。」

「鏡夜先輩。知ってるんですか?」

「知ってるも何もうちの学校の薔薇はすべて妃鶴家から貰い取っているものだ。」

「えーー!じゃ、あの庭園の薔薇も?」

「そうだ。ちなみに部の薔薇もな。」

「へー。」

はじめて知る情報に納得する部員一同。

「ほり。まだまだ知らない」とがたくさんあるからお試し期間なの。

「

「そうそう。」

「ふーん。」

「その間部は休むのか?」

「まあ・・・2日くらい。」

「そうか。まあ、いいだろう。」

環のアシをを得ると二人はバックを片手にわいつと遠慮してしまった。

「どう思つ?お母さん。」

「何ですか?お父さん。」

「田の見えない障害者のことを本当に馨が愛せるかつて」とであるお母さん。

「あー。わからませんよ。お父さん。」

親子の会話を済ませて一人も帰る支度を始める。

「崇。僕はねえー思うんだ。かおりちゃんなら……きっとあの子を幸せにできるよ。」「……そうだな。」

埴ノ塚、鈎ノ塚は先に音楽室を後にした。

「馨がつましくりますよ!」。

そう呟いてハルヒも帰っていく。

次の日はカラッと晴れたいい天気だった。
ダブルベッドの中一人さみしく起きた光。隣には馨の姿がなく変わりに自分の携帯に紙が挟まっていた。

「光へ

今日はやつぱり一人で行つてみる。

モールで飛鳥ちゃんに服でもプレゼントとするよ。」

そう書いてあつた。

なんだか心底心配になつたけど光は薄く笑つて軽井沢のことを思い出す。

途中から馨は付いてきてなかつた・・・だから大丈夫。
そう無理に思つて光は自分を納得させた。
そして、もう一度眠りについたのであつた。

「お待たせ。」「あ。馨先輩。」「

真っ白なワンピースを着た飛鳥を見つけて馨は駆けつける。にっこりと笑ってこちらを向く。でも、その手には白い棒が握られていた。

「大丈夫？」

「ん？」

「一人で来たんだしょ？」

「まあ・・・でも。大丈夫ですよ。」

「そつか。それじゃ行こうか。」

そういうつて馨は飛鳥の開いていた手を握った。が、飛鳥は

「か・・・馨先輩。」

「ん？」

「あの・・・手を握られるときによくいんです。」

そういうつて手からすると離れた。

「ああ。『めん。なら・・・。』

そういうつて馨は飛鳥の手をゆっくりとつかんで自分の腕にからめた。

「いづすればいいかな？」

腕にすがりつくよくな感じになつた飛鳥。

けど、満足そうにこりと笑つてうなずいた。馨も笑つてゆっくりと歩き始めた。

目の見えない障害者と歩くにはいろいろ大変かと思つた馨だが、そ

うでもなかつた。

飛鳥は馨にすべてを任せた感じで安心して白い棒を使わずに歩いていた。

「怖くないの？」

「はい。馨先輩がいるから。」

「そつか。」

「で、どこ行くんですか？」

「洋服買つてあげる。」

「洋服ですか？」

「うん。一人じゃ買いに行けないでしょ？」

「はい。あの入ゴミに一人で行くのは結構危険で・・・。」

そういうつているうちについてしまつた。

人の賑やかな声がひつきりなしに聞こえる。

「これが庶民の店なんですか？」

まるで目の前の光景が見えてるかのよつて言つた飛鳥。
馨は「そう。」と言つてつなづいた。

「うわー。すごいですね。」

「うん。僕もハルヒに教えてもらつたんだ。」

「藤岡先輩ですか？」

「知つてるの？」

「はい。埴ノ塚くんと鈴ノ塚くんに聞いて。」

馨の頭に自分の先輩の弟ズが浮かぶ。

「馨先輩つてお母様がデザイナーなんですよね？」

「そうだよ。」

「私の服を選んでもらつてもいいですか？」

「いいよ。そのつもりだつたし。」

クシャリと優しく飛鳥の頭をなでる馨。

頭をなでた瞬間飛鳥は幸せそうな顔をして目を閉じた。

「最初は何が欲しい？」

「えーと・・・ワンピースがいいです。」

とりあえず近くにあつた服屋に入つていぐ。

綺麗に並べられたたくさんの服をぐるりと見渡して馨はある一枚のワンピースに目をつけた。

それは薄水色の爽やかな印象のワンピースだった。

「飛鳥ちゃんつて肌が白いよね。」

「そうですか？」

「うん。だから、濃い色のほうが肌が強調されるんだ。」

「そうなんですか？」

「うん。だからこれかな？」

「何色ですか？」

「ああ。ごめん。水色だよ。」

そういうと飛鳥は優しくワンピースをなでた。
まるでワンピースを確かめるかのように。

「す」「くきれいなのね。」

「うん。とっても似合つよきつと。」

「じゃ、買つわ。」

そういってにつゝりと笑う飛鳥を見て馨もにつゝりと笑う。ワンピースをむつて馨はレジへとむかう。

その時、

「ちょっとそれ私が田をつけたものなのよ！」

大声を張り上げたものに店にいた何人かが気づいて視線を向ける。同じく馨も田を向ける。

茶髪でチャラついた感じの女は田の前にいるカップルから服を取り上げていた。

「何を言つてるんだ！その服は僕らが先に見つけてレジに持つていこうとしたんだ！」

負けじと相手の優しそうな男も声を張り上げた。が、隣に現れた大きなチャラ男の姿に一歩後ずさったが。

「でも、田をつけたのはあたしらなのよー。」

そういうて踵を返して嫌なチャラカップルは馨達のいるレジへと向かつてきた。

馨は不安になつていた飛鳥の頭をなでて肩に手を置いた。

「ちよつと早くしてくれないー！」

どやわれる馨。もつと不安になつて思わず馨の服の裾をつかむ飛鳥。

「あー。すいません。」

そういうて馨はレジにワンピースを乗せながら後ろのギャルに田を

向ける。

「うわあー。あんたかっこいいねえー。」

そういうつてチャラ女のほうが馨に寄り添う。が、馨はスルリとかわして睨みつける。

「あんた今一人で買い物中?」

「いーや・・・。連れがいるけど何か?」

そういうつて隣にいた飛鳥の頭をなでる。チャラ女が飛鳥を見つめてそして、

「こんな女より私のほうがいいでしょ?」

「痛ツ!」

飛鳥を強く押した。周りが見えなくて思わず転ぶ飛鳥。

「飛鳥!」

馨はチャラ女を突き飛ばして飛鳥に寄り添う。思わず「飛鳥」と叫んでしまうほど馨は慌てた。

「大丈夫か?」

「うん。大丈夫です。」

「痛ーい。もう!私が誘ってるのに来ないの?」

そういうつてチャラ女はチャラ男に目線を移して何かを合図した。

「てめえ一人の彼女を!!--」

「あの。ちょっと静かにしてくださいませんか？」

「はあ？」

いきなり飛鳥の声が響いた。

「「」はあなたたちだけの世界じゃありません。周りのことをわきまえて礼儀くらいたしなつたらどうですか？」

「なんだと！」

「貴方達の持つている那个Tシャツ。はやくあちらのカップルに返して下さい。先に手に取ったのは彼女たちですよ。それにまだあるでしょ？そちらを取ればいいんじゃないのですか？」

その大人びた口調と態度にチャラカップルはたじたじ。そして、周りの睨みつけるような視線に泣々Tシャツを投げつけて帰つて行つた。

「大丈夫？」

「はい。ところで、このTシャツをあのカップルに。」

「うん。」

そういうて馨はさつきのカップルにTシャツを渡しにいった。

「ありがとうございます。」

「いや。いいんだよ。」

「あの子にもお礼を。」

「自分たちで言つてあげて。」

そついつて馨はカップルを連れて行く。

「飛鳥。」

「あーもしかして田の前に?」

「うん。」

「大丈夫ですか?」

「有難う」「ざわいます。」

「いえいえ。」

田が暮れて行き周りがどんどん暗くなつてきついた。

「飛鳥。 そろそろ帰るうか?」

「うん。」

「楽しかつた?」

「うん。 今日はありがと。」

自然と喋り方が慣れ始めて初めて会つた時とは違ひ喋り方になつて
いた。

「明後日は平氣?」

「うん。」

「じゃ、玄関で待つてて。」

「うん。」

そういうて二人は別れて行つた。

明後日にまた会えることを少し楽しみにして。

「へえー、うまく行つたんだ。」

「うん。」

「このまま順調にいくの?」

「えーと・・・わかんないかな。」

「

心底楽しそうに馨は光に話した。

光は心配そうな顔からこいつと笑顔に戻った。

明後日。約束の日になつた。

馨は中等部の玄関でまつていた。

空がだんだんと曇つていき馨は少し心配そうな顔になる。

「あー馨先輩よ。」

下級生が声をかけるが笑顔で対応してそこを動いこいつとはしない。

馨は待つて待つて待つて・。ずっと待つた。

けど・・・飛鳥は来なかつた。

馨の顔が曇つていきそしして・・・体が自然に動いていき玄関を後にした。

(信じじてたのに・・・なんで来てくれないのぞ。)

雨が馨を襲つた。

まるで馨の心を現すかのような雨。

その時、

「馨先輩!」

聞き覚えのある声が後ろから聞こえてピチャピチャと水たまりを蹴飛ばす音がした。

振り向くと白い棒を投げだして感覚だけで走つてくる飛鳥がいた。

「飛鳥・・・。」

「馨先輩!」

「なんで来なかつたのさ・・・。」

「え？」

小さくつぶやきながら覇氣のこもったその言葉に飛鳥は首をかしげる。

「僕……ずっと待ってたんだよーなのになんで……」

「……馨先輩。」

「何でー？」

「……もしかして中等部の玄関にいました？」

その言葉に馨は飛鳥の目を見つめた。

「私……高等部の玄関にいました。」

「ひこりと笑う飛鳥の顔を見て馨は飛鳥が白い棒で高等部に行く姿が思い浮かんだ。

「ゴメンナサイ。」

「……ごめん。」

「いえ。私はじく楽しみにしきて思わず迎えに行っちゃって。」

「僕も。同じ……だね。」

一人して雨の中をもわもわにひこりと笑った。

「帰りましょーか？」

「うん。」

「明日また高等部の玄関で待ってますから。」

「いいよ。」

「え？」

「合格。」

「ん？？」

何の「」とかわからず、首をかしげる飛鳥の肩を抱いて馨は言った。

「愛してるよ。」

飛鳥は赤面して腰を抜かしてしまった。

「ど・・・どうしたの…」

「嬉しくて。なんかもう期間を『えられただけで幸せだったから。』

にこりと笑う飛鳥。

馨はぎゅっと飛鳥を抱きしめて傘もさすに家へと足取りを向けた。

「馨先輩。」

「ん？」

「白い棒があー。」

「ああー！」めん。」

「やつぱりなー。」

「何がですか？」

「あいつはあのことを幸せにできるだらうって予想してたの。」

「へえー。でも環先輩…なんか悔しそうですね。」

「そりやー！後輩に先越されたんだもん！…」

「…あれ？鏡夜先輩が奥さんなんでしょう？」

笑いながらハルヒが言った。

環は口を開けっぱなしで鏡夜のほうを見つめてまたキノコ栽培を始めた。

(後書き)

なんか今日やお母さんっていいね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4103m/>

すれ違い（馨夢？

2011年3月12日20時38分発行